

## 花の宴

花が咲いた

公園に

遊歩道に

キャンパスに

山の中腹に

海沿いの道に

鮮やかに白い

花が咲いた

幼稚園児が

新社会人が

老人が

病室の窓から

病み呆けた

男や女たちが

黄昏時に

アベックたちが

段ボールの隙間から

髭面の男が

花を見上げ

花を見つめ

花吹雪を浴びる

一年に一度の

晴れがましい花の宴に

おそらく誰もが

どこへいくのか

晴れ着に身を包み

おそらく誰もが

心の晴れ着に身を包み

花の喜びの席に座り

花の歌を聞きたいのだ

風は冷たく

理不尽にも風にさらされ

雨にうたれ

雨に穿たれ

花も男たちも

花も女たちも

うち叩かれたりすることは

先刻承知のうえだが

一年に一度の

晴れがましい花の宴に

おそらく誰もが

精一杯の晴れ着に身を包み

花の喜びの席に連なり

花吹雪の歌を

光煌めく歌を

腹の底から歌いたいのだ

## 春も来い

春よ来いと歌う

春はのどかで叙情的で

その兆しが見え始めると

万物は歌い出し

枯れ木もチューリップも

あめんぼうも

足踏みして待ち望んだものだ

今は

春も夏も秋も冬も

境があわあわとして

冬の領分だと思われる時期に

桜が咲いたり

コスモスが咲いたり

蛙が歌ったりする

季節なんて

もともとそんなものかも

知れないが

暖かいと無性に嬉しく

なってしまうから

現金なものだ

温暖化だの

極地の氷が溶け出したのだと

理屈ではわかっているのに

暖かそうな兆しが見えてくると

頬が弛んでしまうのだから

しまらない

霞がたなびき

木蓮が咲き

どこへいくのか

雪柳が咲き乱れ

モミジや梅や桜の芽が

一斉に芽吹こうとタツタラ

パッパラとラッパを鳴らし

地中の水分をギユウツと

吸い寄せるための準備に

余念がない

もうすぐ

入学式が行われ

学校は子供たちの群れで

溢れかえる

九十度に腰を折り曲げた老人が

日向でほんわり欠伸をする

こうなるとどうにも

頬が弛んでしまうのだから

しかたがない

暖かいことで

頭を抱え込むなんて

ひねくれた詩人氣取りにまかせ

今日は今日

今は今

春よ来い

春も来い

やっぱり暖かいうらうらした日向よ

早く来い

## 水仙

うぬぼれ、自己愛、エゴイズム  
神秘、尊重

私のもとへ帰って、愛に応えて  
尊敬、心づかい

花言葉だという  
庭の隅に健気に咲いている水仙の  
香しい、慎ましい香りが  
そういうメッセージを醸すのだろうか

寒い朝  
ひっそりと白い花卉を開き  
人々の足元に蹲るかに  
咲いている

清楚で、ひかえめな花卉の様は

自己愛やエゴイズムという言葉に  
一脈通じるものがある

踏まれ  
気付かれず

生娘が放つ清々しい香りに  
振り向かれないときであろうと  
気丈にすつくと立つ

実は、愛に乾いているのかもしれない  
憂いをいっばいに溜め込んでいるのかも  
しれない

しかし、なりふり構わず  
泣いたり笑ったりということをしな  
かといつて、ただ

どこへいくのか

耐えているだけというのでもない

やっぱり

自己愛に裏打ちされた

神秘の強い力を秘めた

涼やかな仙境に

凜と咲く花なのだろう

(付記)

花言葉―花言葉事典(w e b)を参照

## 風翻る

よい季節です

侘助の新芽は淡く

葉に小さなギザギザがあります

新芽を迎える先輩の葉は

つるりと光っています

この先輩の葉たちが

白い小ぶりの可愛い花を

幾つも幾つも

咲かせてくれました

よい季節です

淡い緑の新芽は

折りからの日の光に透き通りそうに輝き

初めて見るこの世の景色に

いく分驚いた表情を

見せています

先輩の葉たちが

なにも心配いらないよ

君たちの力で

白い小ぶりの

花を咲かせるまで

きつと協力するからね

と囁きかけます

よい季節です

うらうらと射す日に

とても恥ずかしそうに

新芽が顔を火照らせています

とても嬉しそうに

涼し気な風を受けています

## 呪文

書けない書ける書けない書ける  
書ける書けない書ける書けない  
呪文が湧いてくる

いったい

ことばはどこからくるのか

心の隙間に

ポトリと落ちてくることば

たまたまそれを拾うときもある

街中や職場で無数のことばが行き交い

無数の思いが乱れる

その中にこぼれていることば

たまたまそれを拾うときもある

好きになつたり僻んでみたり  
憎まれ口をたたいてみたり

その間にこびりついていることば  
たまたまそれを拾うときもある

かんかんがくがくの議論をしたり  
殴り合いの様相をていしたり

その後に捨てられたことば  
たまたまそれを拾うときもある

いったい

ことばはどこからくるのか

書ける書けない書ける書けない  
書けない書ける書けない書ける

呪文が湧きあがる



## 心を透かし見れば

本当の気持ちとは考えてハタと行き詰まった  
本当の気持ちなどあるのだろうか

笑顔を浮かべているときの気持ち  
渋面をつくっているときの気持ち  
冷たい視線を投げているときの気持ち  
施されているときの気持ち  
施しているつもりの中の気持ち

こう書き連ねていたらとてもきりが無い  
例えば笑顔を浮かべているとき  
涙が出るほど感激しているのかもしれない  
追従笑いを浮かべているだけなのかもしれない  
相手の口説がただ早く終わることだけを  
願っているのかもしれない  
本気で殺したいほど憎らしい思いが

せせら笑わせているのかもしれない

本当の気持ちなど

当の本人でさえわからないことかもしれない  
ケースによって

相手の出方によって  
時間の経過によって

それはめまぐるしく変わっていく  
ことになるのかもしれないから

心を透かし見るなんて  
こんな難しいことはないだろう

しかしいきなり爆弾が降ってきたとしたら  
嬉しいことだろうか

いきなり仕事を誠になったとしたら  
喜ばしいことだろうか

## 自分

多くの中の自分と対面するが  
いったい自分は

確実な

自分でなければならぬ

暗示のていでいて

完全なる

解答でなければならぬ

身近なものさまでいて

はるかなもので

なくてはならない

はるかなものの距離にいて

身近なもので

なくてはならない

多くの中の自分

多くの中に包まれ

多くの中にちりばめられた

多くの自分の中の自分

その自分が的確に

自分でなくてはならない

その自分が常に

自分でなくてはならない

その自分が常に

はるかなものに

通じていなければならない

## 予感

相撲や野球でどちらが勝つか  
たいてい予感が当たる

それなら

取り組み前や

試合前に

予想しろといわれる

しかし予感が走るのは

制限時間いっぱいあたりの

両力士の背中への汗の光り具合や

一球の判定によつて

急に空気が重苦しく傾ぎだす

そんな加減で

なんとなく感じる

後説だろうともいわれる  
誰だつてそうなんだ  
ともいわれる

でもやっぱり

これは予感なのだと思う

いや本能が次の瞬間のことを

ほんの一条

垣間見ただけなのかもしれない

もちろん

自分だけの現象ではないだろう

誰にでもある筈だ

この道行きになが待っているのか

次の瞬間になが来るのか

それを感じなくては誰も

生き伸びてこれなかったであろう

人は鈍になったといわれる

高度な生活習慣が原因だの

それが原因で退化してきたのだの  
諸説紛々だ

でも予感はある

予兆はある

なにかが変だ

なにかがおかしい

その詳しいところが

わからないだけだ

わからないままを装い

わからないことをよいことに

臭い物には蓋をして

日々かまけているのかもしれない

## クリスマス

クリスマスも間近だというのに  
自爆テロだの

酔っぱらい運転だの  
無差別殺傷だのというニュースが  
頻繁に流される

街はクリスマスソングで浮き立ち  
大売り出しの看板が並び  
人はコマネズミよろしく走り回る

夜を徹しての  
仕事に疲れているというのに  
メールやファックスで  
新たな仕事が降ってくる

あるいは、仕事をもぎ取られ

突然、寒空の下に放り出される  
妻も子供もいるのに  
いったい、どうしろというのだ

おぼっちゃまばかりの政治家が  
理屈だけは通りそうな漫談を  
連綿とやらかす

バラエティーばかりが映る  
テレビしか他にはないのだからか  
大型スクリーンの前で  
人はとうに諦め  
ねじけた笑いを浮かべるばかりだ

クリスマスも間近だというのに  
押し寄せてくる波に

人はようよう首まで浸かっているが  
やがて、その力も失せ  
濁流に吞まれていく

なにかが変だ

変ということばは今年を象徴する  
ことばだというが

実に変なことだらけだ

やはり、なにかがおかしい

変なことが普通だという

変なことに慣れてしまうと

間隙を縫って

財をやたら積み上げることや

変なこと目立とうとすることに

やつきになったり

うつつを抜かす羽目に

陥ったりする

命という命が

紙屑みたいに引きちぎられてしまう

クリスマスも間近だというのに

人は、ただの作り笑いが習い性になり

隣がなにをしているのか

なにをしようとしているのか

見ようもしない

見ても、見えないのかもしれない

## ジャズシンガー

すっかり酩酊したジャズシンガーは  
みずすましの軽さで

車と車の間を巧みにすり抜け  
交差点を渡っていく

三ナンバーの車も

バスもトラックも警笛を鳴らし

ジャズシンガーの袖や裾を

掠めてすり抜け

オメエなんかボンネットに

乗っけるのはゴメンダヨ

と二言、三言卑猥なことばで

怒鳴り付け

車輪を軋らせ

ブレーキもかけずに過ぎてゆく

すっかり酩酊したジャズシンガーは  
肥え太ったやつらめ

どうだい度胸はないのかい  
ポンと十メートルぐらい

跳ね飛ばして見る勇氣なぞ

どいつもこいつも持ち合わせてないのかい  
どうだい

どうだい

この真つ赤な血が騒いでるんだ

ニューオリンズ仕込みの

真正正銘のお兄さんの血いだ

欲しくばくれてやろうじゃないか

すっかり酩酊したジャズシンガーは

交差点の真ん中に仰向けに寝ころんだ

パトカーや

救急車や長距離トラックが

警笛を鳴らし

マイクを鳴らし

ジャズシンガーの耳元や指先を

すり抜けて止まり

オメエなんかの血で汚されて

タマルカヨ

サツサトドキヤガレ

と怒鳴り付け

ピストルをもった警察官が

下りてきた

すっかり酩酊したジャズシンガーは

来たなウジ虫ども望むところだ

撃て、撃ちやがれ

心の臓を撃ち抜きやがれ

土手っ腹に鉛の玉を

ぶち込みやがれ

さあやってみろ

と西部劇の役者みたいにみえをきる

すっかり酩酊したジャズシンガーは

ちきしようクソツタレ

肥え太ったやつらめ

俺はちっとも

酔ってなんかないぞ

俺はちっとも

狂ってなんかないぞ

俺はちっとも

怖くなんかないんだぞと

三ナンバーの車も

バスもトラックも

パトカーや

救急車や長距離トラックも

誰一人いなくなった交差点で

ジミーヘンドリックス気取りで

サイケデリックによるめきながら

蛇行しながら叫んでいる



## 開かずの踏切

右からの電車が横切り

遮断機の向こうに

踏切を渡ろうとする

赤いランドセルが見える

少女は楽し気に頬をふくらませ

なにやら縦笛に似たものを

誇らし気に握っている

左からの電車がのろのろと出る

遮断機の向こうに

踏切を渡ろうとする

青年が見える

彼は新聞のページをめくりかけたまま

どこか気の弱そうな

神経質そうな眉を寄せ

警報機をじっと見上げる

右からの電車が重い音で横切り

遮断機の向こうに

踏切を渡ろうとする

母親が見える

彼女は乳母車の子に笑みを投げ

もう少しだからね

と口をすぼめる

左からの電車が矢となって横切り

遮断機の向こうに

踏切を渡ろうとする

腰を二つに折った老人が見える

老人の顔は地面に向けられているから

しかとは見えないが

ナンマイダという呪文を

何十回と唱えているのが知れる

右からの電車がガタガタと横切り

遮断機の向こうに

踏切を渡ろうとする

少年が見える

少年はいい加減にしないかよう

というサインを

こちら側の仲間に送り

三墨コーチが走者を進めるときにのしぐさで

両手をグルグル回した

左からの電車が当然という顔で横切り

遮断機の向こうに

踏切を渡ろうとする

自転車の男が見える

男はいつなんどきでも

目の前の扉が開かれたら

猛獣よろしくダッシュするのだと

ペダルを十回も二十回も踏みしめ

ハンドルを握る手は

じつとり汗ばんでいる

右からの電車が警笛を鳴らして横切り

左からの電車が急停車をしたかと思うと

何事もなかったかのごとくに横切った

遮断機の向こうから

踏切を渡ろうとする

少女や、青年や、母親や、老人や、

少年や、男や、自動車や、サラリーマンたちは

だんだんと俯き加減になり

わずか五メートルの踏切を渡るために

カン、カン、カン、カン、カンと

いつまでも鳴り止まない警報機の音を

ドン、ドン、ドン、ドン、ドンと

足を踏み鳴らしながら

呆けた目を閉じ聞いている

## 泣きたいときに

泣きたい夜もある

そんなときは

泣けばいい

なに憚ることなく

素直に泣けばいい

泣きたい旅もある

道程の辛さに

待ち受けている苦しさに

足が動こうとしない

泣きたい逢瀬もある

肩を抱き

ものも言わず

じつと目と目を合わせる

泣きたい歌もある

喉元まであふれ出てくる

熱く苦いものを

ウイスキーの熱で

思いつきり流したい

およそ、いつのときも

うまくいかない話や

うまくいかない仕事や

うまくいかない恋など

ばかりで

泣くしかないときは

泣けばいい

泣いて、泣いて

泣くだけ泣けば

どこへいくのか

思わず、笑えてきたりする

泣きたい夜もある

泣きたい恋もある

そんなときは

なに憚ることなく

泣きたいだけ

泣けばいい

## 少女

やや傾ぎ加減の立ち姿  
なにか遠い

はるかな思いに導いてくれる  
淡い光の中の少女

少女が歩を進めるたびに  
小刻みに光が揺れる  
小刻みに時がたたらを踏む

その瞳の澄明さ  
その眼差しのしなやかさ  
その唇のやわらかさ

少女が歩を進めるたびに  
小刻みに光が揺れ  
あつと声にならない声が

唇をもれる

遠くはるかなる者が  
存在するとしたら

いかにして  
こんな悲しい過ちを  
しでかすことができるのか

やや傾ぎ加減の立ち姿  
なにか遠い  
はるかな思いに導いてくれる  
淡い光の中の少女

少女が歩を進めるたびに  
小刻みに光が揺れ

どこへいくのか

小さく左右に傾いだ声が  
唇をもれる

幾劫もの時空を

束ねるのであろう

遠くはるかなる者が

存在するとしたら

いかにして

こんなに冷たい仕打ちを

しでかすことができるのか

淡い光の中の少女

どこまでも深く深く透け

どこまでも高く高く

翔けりいく

ほのかな揺らぎにも似た

青い光の中の少女よ

## 母の記憶

八月九日

あの瞬間のぶざまな戦慄を  
川棚というところを知った

空があまりに乾いていたから

大村湾を渡ってくる  
得体のしれないどよめきが

赤々と喉元を焦がし

身内をざわざわと

締め上げてくる冷たいものが

胸のあたりに

激しく渦巻き

滴り落ちるのは

汗だったのか

にわかには湧き起こってきた雲から  
落ちてくる滴だったのか

赤々と燃え上がるのは

この世の光景ではない

彼岸の向こうに

広がるという

鮮烈な紅葉のうち重なり

であったのか

奇妙に澄んだ

清冽な空の広がり

森閑とした

空気を透いた

天上のせせらぎにも似た

軽やかな音曲にのり

得体の知れないどよめきが

目を耳を肌を喉元を

はたはたと

わらわらと打った

それはものたちが

一時の間に

天に競いのぼるといふ

ひしめきの音だったのだろうか

あまりの突然の

ことに

天上の側もがうろたえ騒ぐ

靴音の乱れであったのだろうか

ものたち

それは子を持つ母であったり

日々の糧を得るために働く

車引きであったり

戦地に赴いた恋人の

帰りを待つ少女であったり

産まれ落ちたばかりの

乳飲み子であったりする

ものたち

それは毎日数千人が

乗り降りする駅のホームであったり

祈りの絶えることのない

教会の鐘の音であったり

校門への坂道に積まれた

形のよい石ころであったりする

空があまりに乾いていたから

まるで森閑とした

空気を透いた

天上のせせらぎにも似た

涼しくて軽やかな音曲にのった

得体の知れないどよめきが



大村湾を渡り

目を耳を肌を喉元をはたはたと  
わらわらと打った

母は

得体のしれないどよめきに  
喉元を赤々と焦がし

身内にさわさわと

込み上げてくる

冷たい胸の鼓動に身をまかせ

めくるめくままに

ことばを失い

晴れがましさをさえ感じながら

眼前に揺れ立つ

逆さまの海軍工廠を

じっと

見上げていた

## 「月とつばめ」ほかに寄す

〈ツバメの声と草いきれ〉

〈あといくつこの月を背に〉

〈ある日わたしはなかったものに〉

詩集をいただきました

喉の奥から絶え絶えに紡ぎ出される

ゆらゆらとしたことは

私の心をこうも切なくします

息をするだに苦しいのでしょうか

ことばを紡ぐことが今

それほどに気怠いのでしょうか

〈田圃の傍の白い花を見つめながら〉

〈生きている意味をも失う瞬間がある〉

白い詩集の可愛らしい装丁のなかに

驚くほどの余白がぎつしり埋め込まれています

〈ツグミは何でか分からない〉

〈わたしも何でか分からない〉

痛々しさを覚えるのは

私の単なる思い過ぎでしょうか

私の胸の奥の声がわなないています

この錆びた時間が早足で過ぎ去るのを

ひたすら待っています

じつと立ち止まったまま

私は決然とひたすら待っています

〔注〕「月とつばめ」ほか かつきあみ 作詩

## 万華鏡

花弁と花弁がぶつかり合い、  
定まる

その鮮やかな切れ味  
その得も言われぬ早業

花弁と花弁がくつつき、離れ、  
また定まる

その造形の妙  
その光り加減の玲

花弁と花弁が飛んで、散って、  
定まる

その息つかせぬ間

その無間の広がりへの  
夢